

検証

崩拓銀

<6> 10.10.24

大蔵省が行う金融検査(MOF検)では、大蔵側が経営改善点を列挙した「示達書」を示すのに対し、金融機関側は反省を踏まえて「示達回答書」を提出するのが習わしである。

恐怖政治

つた九〇年十月、上層部はこんな布陣だった。

鈴木茂会長、山内宏頭取、中村弘二副頭取、佐藤安彦副頭取、藤野公毅専務、石黒直文専務。その下に河谷禎昌、海道弘司ら常務が八人。さらに武馬鋭弥ら取締役が十人。これに常勤監査役二人を加えて総勢二百六人がかじを取った。



栄枯盛衰

拓銀に最後の季節がめぐってくる。98年冬。間もなく木々のこずえが葉を完全に落とす

囲を委縮させたのは、海道の後ろ盾に佐藤、さらには鈴木がいることだった。

拓銀の歴代首脳の経歴をたどると、「企画」「人事」「組合」という三つの「畑」が圧倒的に多い。だが、海道は

「お前、現場のことを何も分かっていないのに、何を言た。だれもが逆らえず、黙る」

頭取さえ「裸の王様」

うか。当時のある役員は

このなかで中枢とみられていたのは、鈴木会長、佐藤副頭取、海道常務の三人。そのトデコムの経営内容に、わずかな疑問を挟んだ隣間の反応

いの閑職に異動する人事が相次いでいた。海道や佐藤に反したのが原因、とささやかれた。直接的に「海道の言うことを聞け」と、佐藤からくぎを刺された幹部もいた。

こうして、物と言えぬ空気が濃くなっていく。すずんで軍門に下る幹部も多かった。

「あの一派以外は、人にあらず、だった」と当時の幹部。

「二派」は懐に飛び込んでくる者は優しく包み、逆らう者は徹底的に排除した。

一方でトップの山内頭取は、海道の勢いの前にま

山内は入行年次で佐藤よりも一年先輩。と

かたよった権力構造と、物言えぬ恐怖政治。これが拓銀の免疫力を奪い、「病巣」は着実に広がった。

敬称略、肩書は当時
(拓銀問題取材班)